

況。JA忠類は「10台の発電機でやりくりしているが、現場は非常に混乱している」とする。幕別町忠類の岩谷史人さん（55）は発電機を借りて搾乳はできたが、工場も停電でストップしている。「廃棄しなければならないなら非常に辛い」と話した。

一部地域での断水も影響が大きい。池田町富岡地区の酪農家川本一見さん方では、午前8時ごろに町から飲料水60リットルが配布された。ただ、水がないと搾乳設備

の洗浄はできず、妻の弓香子さん（56）は「牛の乳房炎が心配。早く復旧してほしい」と望んだ。

JA幕別町は野菜の出荷も懸念する。「停電でダイコンやニンジン、パレイショなどの選果場、大型冷蔵庫が機能していない。農作物は苫小牧港に運ぶが、道路規制などを含めて確認中。長引けば影響は大きい」と心配している。

産業・物流へ影響深刻 設備稼働せず生乳廃棄 手作業で搾乳も 2018年9月7日

酪農現場では胆振東部地震による停電で乳業メーカーなどの加工設備が稼働しないため、搾った生乳を廃棄する作業が行われている。乳牛の乳房の炎症を防ぐため搾乳をやめるわけにはいかず、全国有数の酪農地帯・十勝で生産者が苦悩している。



生乳の廃棄が進む帯広畜産大学畜産フィールド科学センターの牛舎

多くの乳牛は毎日朝と夕の2回搾乳する。通常は集荷されて乳業メーカーに運ばれるが、停電で工場も稼働していないため、受け入れがストップ。生乳の行き先がなくなっている。

搾乳牛約80頭を飼育する帯広畜産大学では、6日朝から生乳を捨て、ふん尿とともに堆肥にしている。非常用の発電設備がなく、搾乳用機械も動かせない。教員や学生が15人ほどで手作業で搾らざるを得ない状況だ。しゃがんだままの搾乳作業が2、3時間続き、「腰が痛い」との声も上がる。

同大学畜産フィールド科学センターの木田克弥センター長（62）は「手塩にかけた生産物を捨てるのはもったいない。このままではコストだけがかかる一方。早期復旧をひたすら祈るだけだ」と話していた。

十勝農業 正常化へ 牛乳工場や選果再開 2018年9月10日

胆振東部地震による停電が8日未明に完全復旧したことを受け、十勝管内の農業が正常化に向けて動き出した。生乳の受け入れがストップした明治の十勝工場（芽室）などが稼働を順次再開し、10日朝にはカルビーポテト帯広工場も生産を開始した。生産者の搾乳・収穫作業は平時に戻りつつある。ただ、加工を含めた農業の機械化が進む中で、非常時の電源をいかに確保するか課題が残った。

池田町で約100頭の乳牛を飼育する酪農家川本あき子さん（81）は6日未明の停電後、搾乳ができなくなり、同日午後6時ようやく、JAを通じて発電機を入手した。

この間、搾乳の遅れで乳房炎になる牛が出た。また断水が追い打ちをかけ、牛の飲み水が不足。搾乳量は約2割減ったという。川本さんは「今後、停電時には発電機をすぐに貸してもらえよう知り合いに相談したい」と話す。

搾乳ロボットを導入する帯広市の豊西牧場では、電力が24時間必要に。自前の発電機2台でロボットを動かせるはずだったが、実際には動きが鈍く、JAが手配した大容量発電機を追加した。藤井誠代表は「ロボットはより多くの電力が必要になると実感した」と話す。

今回の停電では、生乳加工工場の受け入れ態勢も酪農



電力が復旧しロボット搾乳機での作業が進む牧場

家の明暗を分けた。よつ葉乳業十勝主管工場（音更）以外の工場が操業を停止し、8日に全工場で再開。明治の